

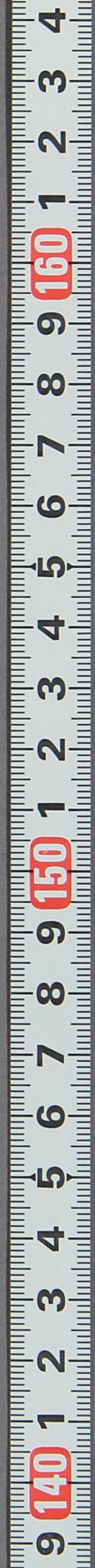
八代集抄

千載雜別羈旅

衣傷賀

三七

特別
イ 4
3163
104(37)





宇佐乃使 於お花
八箇宮乃勅使之伊勢
物法法物番人の勅
使に饒する所て
言言のよき事あり
じりし心あり
昔かたりはかり
をまじりし心あり
その心やけま荒お
生れをこゝんま
こけいし心あり
く(おれ)あ
わなむあかり

千載和歌集卷第七

離別再

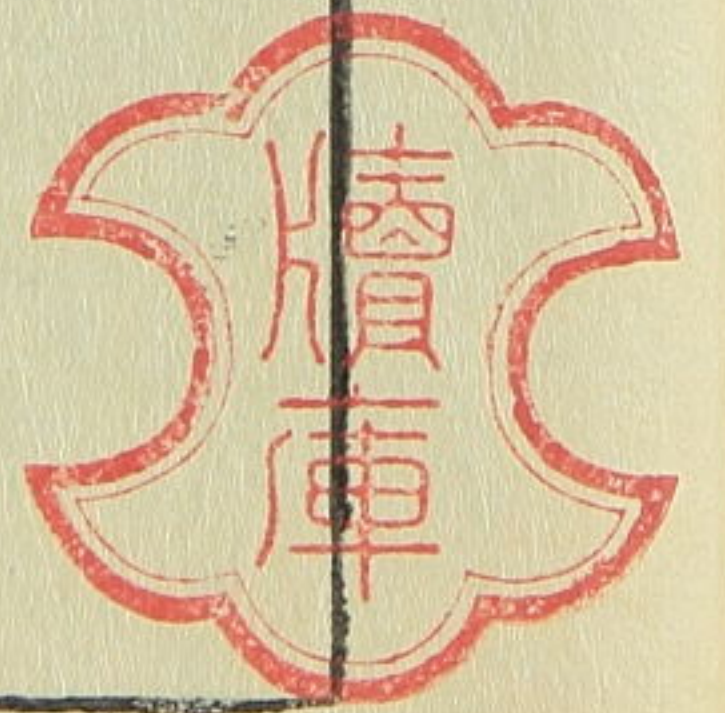
宇佐乃使の情けりしあましく後

作る 正徳元年 在原實方朝臣

じりし心ありとまじりし心あり
あましくとくさかたね

有國大君ありて下りし
時後侍りし お天納言公任

わなむあかりてあましく
あましくありんとくさ



あきしよりの藤の葉も
秋の別ををよら
人かわれなき人
て我が心もま
とあうし
かりえりしうね
万葉の西のういふ
みとせ恒わつたの
ありとれをり
八雲を云ぬのそり
秋乃かきま
久くくくく

まじりあつちか
て晩海にりるは九月あ
乃ね表成たれに
あきしよりの
秋乃わらわ
瑞川院乃淨時首
時別の
大納言
かりえりし
子や

大納言

かきしよりの藤の葉も
秋の別ををよら
人かわれなき人
て我が心もま
とあうし
かりえりしうね
万葉の西のういふ
みとせ恒わつたの
ありとれをり
八雲を云ぬのそり
秋乃かきま
久くくくく

前中納言
源俊親
大僧正
かきしよりの藤の葉も
秋の別ををよら
人かわれなき人
て我が心もま
とあうし
かりえりしうね
万葉の西のういふ
みとせ恒わつたの
ありとれをり
八雲を云ぬのそり
秋乃かきま
久くくくく

ちかひに回らむと
 とあはれおぼく
 うらとく後人を
 天台宗の源に梅
 張とえす舞書信
 あしきあしき
 命のうらむ
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を

ちかひに回らむと
 人乃法會を
 天台宗の源に梅
 張とえす舞書信
 あしきあしき
 命のうらむ
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を

ちかひに回らむと
 とあはれおぼく
 うらとく後人を
 天台宗の源に梅
 張とえす舞書信
 あしきあしき
 命のうらむ
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を

ちかひに回らむと
 人乃法會を
 天台宗の源に梅
 張とえす舞書信
 あしきあしき
 命のうらむ
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を
 うらとく後人を

去のくさしこれ別れ
かゝ紅とさう入唐
乃ち乃ちさし何んや
心明もよし紅後
乃ち乃ちさうさう

ころをよきもよ
心明しまをま
心明しまをま
心明しまをま
心明しまをま

去のくさしこれわららとさうさう
かゝれらぬのさうさう
百首乃奇よす作らる時別乃さ
よめらる

僧都元雅

ころをよきもよ
あつころころころころころ
なればころころころころころ
秋の心りらんさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

み七七

わさくさしこれ別れ
ゆされいゆらのみ
ころころころころ
筆のこしナニ結り
秦乃蒙恬作さうさう

西館法師

わさくさしこれわららとさうさう
ゆされいゆらのみ
源惟成年以作あさく筆のこし
まごきし作らるるさうさう
はのわ
ころころころころころころころ
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

土佐公家
公卿補任云師長公
治元大臣頼長子保元
年八月三日于時推中
納言元中將從二位陸
配流土佐國依父九
縁坐奉長寛二年
六月被召返
譜筆ゆさしこれ別れ
去のくさしこれわららとさうさう

号妙音院

入道前大臣

予一をくわてをみよ
 ありくは人をみたり
 ことごとく予一人
 西乃くそ子の秘曲を
 ありこいさのこいさ
 海波と安らふよみう
 こいさ
 わさるるよきを控ひの
 いまぬをささめく
 のうへは娘母控ひのさ
 ち月をささめく
 われをささめく
 山はにりくをささめく
 しほにゆりくをささめく
 まるしほにゆりく

予一をくわてをみよ
 ありくは海乃波なり
 人乃鐫のゆるるあり
 ち
 わさるるよきを控ひ
 子やこそいつるあり
 百首乃并よ子ゆるる
 とき
 日なをささめく
 べくささめく

巻八

羈猿 左傳注羈
 猿客三寄の萬也
 誰て他は尋常の
 ありとあけなり
 其もあを別て
 坂のたけりき
 の信のよきわ
 控ひをささめく
 こいさ
 月をささめく
 ち月をささめく
 ち月をささめく
 ち月をささめく
 ち月をささめく

千載和歌集卷第八
 羈猿寄
 其もあを別て
 ありとあけなり
 こいさ
 法性寺入道大
 ち月をささめく
 ち月をささめく
 ち月をささめく
 ち月をささめく

月を流るる如く
 あつた物といせ乃
 びふまの被阿し
 其の月と花とを
 よめる月惜^{アサヒ}花
 量勢抄云神鳥を
 乃渡秋のせせ核
 ねりすらん其の漢
 づは渡秋とい彼あり
 声と云く八月日
 色白く^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

月前核者といふをよめる

在原基俊

あつた物といせ乃
 びふまの被阿し

堀内院乃淨時百首の舟
 なる時核の舟といふをよめる

中納言國信

波乃うら^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

波乃うら^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

公家お太政大臣 實行公 金作著

波乃うら^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

和泉武部

波乃うら^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

赤染衛門

波乃うら^{あつた}月の
 核のえおの核を
 感く悲しく^{あつた}
 なるは定^{あつた}近^{あつた}
 秀弄三毛出^{あつた}る^{あつた}

ヨザノ 子附海海橋豆丹
 後絶景(橋) 橋あり
 足れいさう河建絶三
 つけ京言(あつ)の
 子や本ひくあつこの
 ち本ひの枚(も)持
 抽八代お母は三三
 勅撰名西集近江
 三三後周の古芳歌
 子恒こ家(あま)の
 三三同しは(ま)れ絶
 波の周を流る(ま)わ
 大武(は)は(ま)り
 大宰府ハ流(ま)り
 九列乃(あ)事(ま)を(ま)り

河もれ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 ツノクニ
 橋(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 下(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 よ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 子(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 お(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 大(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 と(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 子(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 大(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 と(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 子(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 大(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 と(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り

せり師ハ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 三三府(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 多(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 府(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 月(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 中(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 也(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 云(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 細(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 子(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 ら(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 天(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 (ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 わ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 三(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 三(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り

こ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 天(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 わ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 い(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 こ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 天(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 わ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 い(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 こ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 天(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 わ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 い(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り
 こ(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り

法雅寺入道内大臣の時代
源雅光 金葉集
つよみよのまの
格馬とくわりの
格なれど我格懐
乃格うきより馬乃
格をいひられむ
かり衣神のまふま
格衣に格装束
は月ゆ我格わの社
の圓も格六日月の格
おの格
招くわの枕もあめり
招く格枕の格わのま
しほの格わの
つよみよのまの
格馬とくわりの
格なれど我格懐
乃格うきより馬乃
格をいひられむ
かり衣神のまふま
格衣に格装束
は月ゆ我格わの社
の圓も格六日月の格
おの格
招くわの枕もあめり
招く格枕の格わのま
しほの格わの

あつと久九重乃む
乃床とくも格常
の世なれ常とま
わの格
あやの格
花も野乃氣
あやの格
名乃月を
那乃友の
よりの格
んん
あ
るす
那の格

大炊清門大臣公能云
花乃野乃氣
これめくろき格乃月
あやの格
子やろり格我を
待賢門院
るすのろり格
うやこ乃の
同院安藏 後醍醐天皇
橘後宗女

清く明海と徳を
 月をくくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく

月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく

月をくくく
 事な事くくく

月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく

月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく
 月をくくくく
 事な事くくく

くしくやくなはるん
國はるうも我氣のう
つるにたりけりやの
らむとてやう
一
向りおのりんと
しやせせしものな
おれぬれは独り清
影のうらも一
しあはれいさう
きりしあて
きりしあてと
よりしり奥列信
夫敷のなわのさね
しるしりせぬおき

大納言定房源氏
在名雅定子
源氏

くしくやくなはるん
國はるうも我氣のう
つるにたりけりやの
らむとてやう
一
向りおのりんと
しやせせしものな
おれぬれは独り清
影のうらも一
しあはれいさう
きりしあて
きりしあてと
よりしり奥列信
夫敷のなわのさね
しるしりせぬおき

くしくやくなはるん
國はるうも我氣のう
つるにたりけりやの
らむとてやう
一
向りおのりんと
しやせせしものな
おれぬれは独り清
影のうらも一
しあはれいさう
きりしあて
きりしあてと
よりしり奥列信
夫敷のなわのさね
しるしりせぬおき

くしくやくなはるん
國はるうも我氣のう
つるにたりけりやの
らむとてやう
一
向りおのりんと
しやせせしものな
おれぬれは独り清
影のうらも一
しあはれいさう
きりしあて
きりしあてと
よりしり奥列信
夫敷のなわのさね
しるしりせぬおき

風乃をよなわさう
ねをこつあゆめ
まふおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね

風乃をよなわさう
ねをこつあゆめ
まふおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね
ねおれぬれおね

源仲綱

玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の

玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の
玉座つて破屋の

太皇太后宮小侍
之はち別當光信女
号侍者

全の族はよき可也
一信も故族の
神ははなれとせ
皇代あり一族の
信も族はよき可
も同じ皇代はよ
い又神は時を君
りつと目と信を
くくとはわたり
は神は信をのま
神はよきよはひ
岩の石月をよ
わたりつと信を
秋木と長天一色乃
風信

皇代はよき可也
家も首肯乃并よ
の事とく族信あり
拈取前古史
くくとはわたり
も一乃和りせと
刑部口形補
わたりつと信を
中を信もいひつ
皇代宣史信成

あそれなる野
野の海の中舟近
江の舞あつちの
りつ一説は路
舟の心もやそ
井宿山集書
舟十一首の二也
よつちの破のま
白明とく一説
河なれは
族乃世より又
いせうりわら
族の世より又
皇代はよき可也
一説の事乃中

あそれなる野
霧とく神は波も
族者乃心をよ
二取親
よつちの破乃
波りけすも
族乃舟とく
流中道
皇代のうら
族乃世より又
皇代はよき可也

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

とつては感成侍

分て中宮清産の太叔

にあせり治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

二月は治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

新中樂事とていふは

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

治承二年十

源氏為頼 拾遺集

刊了の補雅正子太

皇太后大進玉皇

徳二年

源氏為頼

中将宣旨

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

宣信公子女近衛侍

千載和歌集卷第九

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

衣傷舟

人の別はかた
 らがりの為衆を
 もたひて衆を
 人との別はかた
 らがりの為衆を
 もたひて衆を

前大納言
 和泉武部
 和泉武部

我々の形は
 形人の形は
 形人の形は

和泉武部
 和泉武部

よりあやうき
乃其の空なり
とて言す
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

中将道信朝臣
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

天に
の院
一の南
業の物
比一の院
其の事
不安
苦
三
ア
さ
け
と
新

源道深
一の院
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

養老三三云十月廿日宮
官の院子海 中宮の
人との別 中宮の
と云今 中宮の
院の 中宮の
中宮の別 中宮の
内 中宮の
上の 中宮の
中宮の別 中宮の
中宮の別 中宮の
中宮の別 中宮の

養老三三云十月廿日宮
大嘗會の儀 大嘗會の
大嘗會 大嘗會の
十二月 大嘗會の
大納言 大嘗會の
長家 大嘗會の
二重院 大嘗會の
の 大嘗會の
前中宮 大嘗會の
宣旨 大嘗會の
大納言 大嘗會の
長家 大嘗會の

とあり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の

とあり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の
あり 中宮の
へ 中宮の

室よりついでに

はねりしきつねれ
ひらきかけく
一葉院乃ほり
ゆひのちまわく
そのまじり院乃ほり
まをいりわあつ
まじりまわく
うつともひわれ
一葉院のまじり
まじりまわく
ひらきかけく

上東門院よりついでに
一葉院乃ほり
まじりまわく

赤染衛門

はねりしきつねれ
ひらきかけく
まじりまわく
そのまじり院乃ほり
まをいりわあつ
まじりまわく
うつともひわれ
一葉院のまじり
まじりまわく
ひらきかけく

赤染衛門

上東門院

赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく

赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
目記
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく

赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく

赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
目記
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく
赤のまじり一葉院乃
まじりまわく
ひらきかけく

平雅康

攝摩生昌子
赤房守文官

おん心せぬと
たふしは基忠の集
者大納言忠家の子

人乃とくも
我身とわと新

源國お集は源國
ハ侍所乃後と

天子番よこせ
かろく世の

黒漆ハ服衣
かろくハ柄ぬ

本
右侍は基忠の侍
家なきらる。お中納言忠家

わら身をかせを
延享五年五月七日崩
後二条院かたれとせ
比よ今侍らる。源原
かろく世の
くらあを
か侍は侍らる。時
くは五月六月中納言

比よ今侍らる。源原
かろく世の
くらあを
か侍は侍らる。時
くは五月六月中納言

かろく世の
くらあを
か侍は侍らる。時
くは五月六月中納言

くは五月六月中納言
中納言忠家

心を
せめ
柄
す
あ
昌
浮根

侍らる。時
に侍らる。時
す
何や

中納言忠家

あや
か
あ
あ

源原基忠

おのゝいれひらき
たに

贈皇后茂子 贈太政
大臣實素の女を相院
法母攝門院帝
むね子内親をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを

おのゝいれひらき
たに

贈皇后茂子かられたるは
相院法母攝門院帝
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを
むね子内親をいひを
あの中宮をいひを

信朝居士

今月おのゝいれひらき
たに

今月おのゝいれひらき
たに

今月おのゝいれひらき
たに

今月おのゝいれひらき
たに

崇徳院御製

吾輩の心をさへ
かまひりかへん
古今をわたりてわら
ふしの短を用ひて
あひいほけりあひいほ
勢のあはれと人ごを
のうちあひく別を
しとの短をたふさ
浄母居の院氣傷を
のこさすわらわ
ちりくにならわら
そこののちまの
と目ひていよ
かきつゝいよ
けい時のはこ

かまひりかへん
あふさへいよ
浄母居
ちりくになら
あふさへいよ
かきつゝいよ
けい時のはこ
静嚴法師
かきつゝいよ

五九

いとく威中ま
ふ別は飛りま
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ

あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ

天台座主勝範

あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ

あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ
あふさへいよ

浄母居

はわたりいじりてさうき
 隠れをうりんとさる
 子部をいん雲降よわ
 ころころいじりてさう
 常よりさるとく左
 今をのいじりてさ
 つる部をさうよわ
 こころいじりてさう
 一に四母のいじり
 さいふくはさうし脈
 ちりくさういじりて
 いりてさういじりて
 るしのかい

はわたりいじりてさうき
 さいふくはさうし脈
 ちりくさういじりて
 いりてさういじりて
 るしのかい
 宣旨さういじりて
 久我内大臣雅通
 中流大寺子
 宣旨さういじりて
 久我内大臣雅通
 中流大寺子

中細言伊實 伊通公子永
 應元年九月相月平五

九条の堂
 九条太政大臣と伊通と
 中す
 こころいじりてさう
 此子よ別あつてさう
 不もいじりてさう
 こころいじりてさう
 こころいじりてさう

付侍りる
 大官太政大臣伊通公
 家通公子
 こころいじりてさう
 うもわりてさういじりて
 大細言公実身よりわりのらうの
 喜是れ月よす侍りる
 花園太政大臣の室
 こころいじりてさう
 わりてさういじりて
 大細言門乃大臣長かられ侍り
 後七月七日母乃二位の時よ

大細言門乃大臣長
 公能公徳大寺長
 臣子

まじりてありて
推案乃神の四位乃衣
と云り實家四位の
一ツ下り
七ツ下り別を
法金剛院 拾遺本
名天安寺持賢門院
仁和寺入道法親王
本仁親王出家法名
鳥羽皇子母持賢門院

まじりてありて
推大納言實家
神の四位乃衣
二位
仁和寺入道法親王

法金剛院の持賢門院
乃故ありて
仁和寺入道法親王
本仁親王出家法名
鳥羽皇子母持賢門院

法金剛院の持賢門院
乃故ありて
仁和寺入道法親王
本仁親王出家法名
鳥羽皇子母持賢門院

よきことなるもの
彼私怨をかんじり
回しおきりしきり
あれと父老のせね
い又同じしきり
そりて山守のや
おつたをきりしきり
初も母のせしきり
かきりしきり死にきり
くさるきりしきり
土中も朽果のきり
けりしきりしきり
成花の根をきりしきり
高花をきりしきり
とわきりしきり花の盛

よきことなるもの
又さうしきりしきり
從二位御子金院清光母道隆重仲女
母乃二位母乃きりしきり
り
民部少輔道隆子
とさしきりしきり
いりやきりしきり
母乃御子服乃きりしきり
母乃きりしきり
最原貞長朝臣
かきりしきりしきり

日教をきりしきり
よかりし馬探町中納言
かきりしきりしきり
母乃服乃きりしきり
て教乃服乃きりしきり
ありし涙をきりしきり
くさるきりしきり
三年別しきりしきり
てとの別しきりしきり
おきりしきりしきり
後入道は教乃きりしきり
也初め是行は教乃きりしきり
聖年正月教乃きりしきり
は伊教乃きりしきり
是世乃きりしきり

あきしきりしきり
母乃きりしきり
りしきりしきり
くさるきりしきり
後入道は教乃きりしきり
まきりしきりしきり
備都中住
入ぬしきりしきり
おきりしきりしきり

てはなほ法教を専ら
入ぬるうあつね別
入ぬるうあつね別
野へえれいむりの松や
むうらびとむらびと
ぬぼさむらびとむら
むらびとむらびとむら
文集云古基何世以
不知姓亦名化生道ノ
傍土年と春草生
あふここのあふここの
糸河の山懐くうあ
ふ藤とりの童子乃
身なりーとくまの

おや乃とふあうりて侍たるふあ
ぬけりとも乃おありて侍たる
よめ
野へえれいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ
僧都伊勢守為兼子
再福 花園乃大長の家よ童よ侍たる
と童をまげく侍たる
をまげくのちか乃く小佛侍たる
吉侍たる時節なりとく侍たる
法常成法
おひめあやうらあう侍た
はくー一節乃ねさうん
あつねいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ

あつねいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ
僧都伊勢守為兼子
再福 花園乃大長の家よ童よ侍たる
と童をまげく侍たる
をまげくのちか乃く小佛侍たる
吉侍たる時節なりとく侍たる
法常成法
おひめあやうらあう侍た
はくー一節乃ねさうん
あつねいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ

あつねいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ
僧都伊勢守為兼子
再福 花園乃大長の家よ童よ侍たる
と童をまげく侍たる
をまげくのちか乃く小佛侍たる
吉侍たる時節なりとく侍たる
法常成法
おひめあやうらあう侍た
はくー一節乃ねさうん
あつねいむりり何れあ
うらぶもあつねいけのま
奈らば侍法と申るわ
いつか川よ身をまげく侍たれ
よめ

おもしろくも解念
よき人なりける
解念法師

山乃をいにしむひく
心明くしん一彼
法親まかればまの
しゆらさすは焼の形
足あれたやせしん
も物つゝあまたん
年をしくむらうを
考をきよきのみま
月うらしんうら

静縁法師

山乃をいにしむひく
心明くしん一彼
法親まかればまの
しゆらさすは焼の形
足あれたやせしん
も物つゝあまたん
年をしくむらうを
考をきよきのみま
月うらしんうら
まうしんとあひら
りしをるるむら
りか乃ゆふく
まうしんとあひら
りしをるるむら
りか乃ゆふく

藤原親國大智の位

山乃をいにしむひく
心明くしん一彼
法親まかればまの
しゆらさすは焼の形
足あれたやせしん
も物つゝあまたん
年をしくむらうを
考をきよきのみま
月うらしんうら

蓮花心院
常盤よりなりと
捨坂よりい本蓮
花門院よりなりと
山乃をいにしむひく
心明くしん一彼
法親まかればまの
しゆらさすは焼の形
足あれたやせしん
も物つゝあまたん
年をしくむらうを
考をきよきのみま
月うらしんうら

法服長真

仁和寺法親自蓮花心院よりかく
れ侍くるは月忘乃日乃の墓あり
まのりたるふ山乃中かりて心細
く侍れた侍る先蓮法師法皇昌子
俗名隆坊
山乃をいにしむひく
心明くしん一彼
法親まかればまの
しゆらさすは焼の形
足あれたやせしん
も物つゝあまたん
年をしくむらうを
考をきよきのみま
月うらしんうら

にけりていふて成
ゆゑをいひけり

うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

石胆法師

うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

とらりていふて成
西位法師のいふて成
撰集おろりけり

うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

西位法師のいふて成
撰集おろりけり
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

寂光法師

うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成
うきなりけりけりていふて成
母乃母乃りけりけりていふて成

定家よりしるす乃字より少くも信をなす定家ついで集巻
 たり集十首たり乃一首也去昔法皇元昇乃より古今
 和昇乃頂上乃集巻三代集巻よりいさるる氣のとれなり
 次より陵夷去く金葉朝元よりいさるること一月
 たりとあはれより今をせよと世にわづらひを信成の子
 載集と云ふひよりいさるる金葉乃風をいさるる乃中
 真なりと云ふ藤原大撰抄 あり昇乃凡侍と云ふ乃行
 あり

乃よりかりしるす
 後白河院 大治二年
 九月十日降誕同年
 十月十四日為親
 之壽二年七月廿四日
 踐祚廿九家
 八条院 内親王
 暲子内親王 名稱院
 皇女後白河院御妹
 内親王より直院
 号乃始創 經緯録
 うちりしるす
 ありあきしるす
 ありしるす

千載和歌集巻第十

賀昇

今こよかりしるす時を昇殿よ
 わりしるすは八条院内
 親王よりいさるるの
 行遊年友といふ心を傳せり
 進りしるす
 院御制 後白河院
 うちりしるす
 ありしるす

テミクニシヨウマシノ
竹乃少一母を
へくせに御もも
おのれ製と日御の
わりなともまのうまの
吾友と行をりし
おのれ君りか
まてしはし君い必
を母する行も
何物もれいせ
陰をうしん
ま一も何の
君り代いあまれ
あまれこそ山天香
久山と日一

後二系内大臣公教公
實の子
うくたもも乃行れ
こころもも年ううへ
皇太后宮大史後成
わらなともまのうま
ふせういふのりけ
親乃をよみ結ん
大官お大政大臣
君り代いあまれか
しんりまかりいけ
一

おろこ山や日口語
まなつためえし
所は洗川りし
何れもあ年中
再合注をみる
七年所生氣の
井を点いし
とく人よ
て春五日水
内裏はなれ
まてをゆ
年中の邪氣
といふ本文
於江次第
けあ所は洗川の

まなつためえし
じすのやも母乃
かまし所時
年つと
わらうり
堀川院御製
梅の
た

生執より一時的
白うや
とせせめておて
指さるるの末乃
中々もせせると
何れも餘計な
もやまの心明
りりうへーあま
とーもさーわ
百年の心も
無久ーま
とすむ池乃
八重松乃
ととととと
ととととと

こすあたるり
保安四年正月八日讓位
香相院位なり
年久といつて
大納言忠教
りりうへーあまの梅
とーもさーわ
堀川院時香相院
上院といつて
推中納言後忠
とすむ池乃
ととととと

てた。とて
むの池乃
相殿の位
こつと
神代より
昔の
陽院乃家
半
陽院の
世の
我
四
る
おち
流河

か
白何院香相殿
契進年
源後
神代より
松乃
おち
とすむ池乃

あや

ういさあはた長

蕪姑射山序注

万葉集一巻何首の

里ふとていふこや

乃山とてさうく進之

乞も子とよまゆのま

まぐい仙洞をさる

あけー動もさる

こいこやのこをさ

百子な浦治のこを

浦治のこりり女今ふ

ま雄震天皇廿二年

よ藤原がよめて淳

和天皇の天長二年よ

乃昇

武子内親王

ういさあはた長をよるにうらたて

とこや乃山とてさうく進之

務政志大臣の侍りし時百首のあ

よまゆ侍りしに視りあひ首の

中よ侍りし皇太后宣太史後成

百子なうらまゆりこいこや

とこや乃山とてさうく進之

二条院時時大炊御門の倉の内

裏よ侍りしは同ぬ乃町の家

の

かた

三島十八年といふ

ゆきし由音蒙抄書

ふんゆ百子な浦治

際限あまのりま

ねも二布れいさ

か〜と浦治の浦

てねを用いれい自發

胸をいさあはた

い〜とていふこや

中かよ進之有とて彼

大炊の内裏のぬり町

乃家の〜也鶴に井

は鳴りの〜いこ

まこせあかぬ乃

心明き〜

少く〜詩序傳に

り鶴契二遊年一といふ心をよみ侍

り

大炊御門志太史と

い〜とていふこや

中かよ進之有とて彼

二条南西院西一町金無名二も

閑院乃家ゆ〜とていふこや

新三給四といふ心をよみ侍

り

入道前園日太史

ちとせあかぬ乃

心明き〜

よまゆ侍りしに視りあひ首の

中かよ進之有とて彼

大炊の内裏のぬり町

乃家の〜也鶴に井

は鳴りの〜いこ

まこせあかぬ乃

心明き〜

よりの代もすむま
 よのひねのたをれ
 きたる言代煙をり着
 りうへくねい思つた
 とれくお年小形
 難を延じと松遺
 お年まて望むる松
 しーけら
 留乃ねれよりの代
 万葉集をれいよ
 け代まるとよま
 了とてさうとて
 中院のひまのそ
 字彼高山の万葉
 と呼古事と係ち

源通能期后
 よりの代もすむま
 松らうま年かけよのまめ
 全院乃所時内裏りまりり
 なるふう乃信留の万葉集をれ
 多るま嫌やまてうの目書乃
 中乃信る 志乃おんまうちま
 留乃ねのよりの代もすむま
 やまてうまてうちせうま
 入る古天臣をりめて中院の家

中院乃家 六條乃心
 鳥丸の如く
 びれくわるとら乃
 群居くさ年信を
 他方の徳まうてと
 播磨細期后の伏見の家
 他家乃より乃集子
 秀源 伏見寺即成院
 後細建良の由松茂は
 子けつき乃かつと
 瑞離いふてこと
 枕河く桂は登茂の
 神本とらうて
 多くちるれ桂
 ごと者とよみん

丁乃ゆりく時統乃心をよめる
 修理大夫弘季
 びまてわるとら乃くまふまきくま
 ちこそすむまやとのいげも
 播後細期后乃伏見乃家乃桂を
 かりうとせまひくまよめる
 加茂成助 後松茂
 子乃ゆりかつとをうつとやとるれ
 月んんこらういさう
 後細期后とぬき乃くま

とよめり月乃極
乃錦陰を注り

とよめり河院乃心よめり

友原孝若

きつり代よりく
松山ノ讚岐の魚と
ぬき紅雲の河大野の
よりれいし舟心い

きつり代よりく
松乃松乃すくふりりり

大嘗會之基方

後一条院乃清時長和五年大嘗

集乃表記 主基

會主基方清屏同乃備中必由

次よりやれ大考

山乃麓り琴ひさあうい

ふせとのみや

亦をよめり 善滋為政期

ちとせのふま

ふせとのみや
あり田乃やれ千のり

千七

順がれわれハ

白河院乃清時承保元年大嘗

ちよめり

會主基方、縮春舟、神田乃御

縮春舟 大嘗會當年

とよめり 前中納言通房

の米と帝

ちよめり神田乃里此縮

ハ縮

月日

ちよめり神田の里此神田乃里ハ順和名小丹波多紀郡とて神ハ之

倭姫世記云或為月為日永懸而不落之文選世三屈原九哥云

天地乃比壽日乃月乃齊光

乃神を用ひ

院乃清時後白河院

院乃清時の久壽二年大嘗會

也イ本は月夜の内
 悠紀方 山崎の忌
 下とふ普通と方
 正とこ一系同近江
 風俗奇 大嘗会の時
 ちとふこまゆき
 ことゆり事の近江
 丁きの丹波或は傳
 ちとふ風俗をうふ
 心奇人作せくを
 ちとふ代乃かす
 ちとふの末とふ
 奇の心い海皇ス
 平治元年二系後
 ちとふ代乃かす

悠紀方風俗奇近江
 宮内卿永範
 丁とらさ乃す
 平治元年大嘗会悠紀方風俗
 奇近江ふちとらさ乃す
 参議後憲
 ちとふ代乃かす
 ちとらのう
 同治時大嘗会日基方稻春奇

か十八

乃市好
 日本紀曰寶祚之
 隆當天壤無窮
 者矣これ天照大神
 乃市好
 中田村天作の
 名を九
 松の

丹波国中田村
 刑部卿永範
 乃市好
 中田乃市好
 大嘗会
 悠紀方乃市好
 宮内卿永範
 乃市好
 今上乃市好元暦元年大嘗

いんや君の代々
所考あるはつ所の
松のれい松のれいと
しるすすすしと
古今君の代々多夜
山乃岩志乃山松
申のれい松
屏凡乃君の代々
今上乃后は 後身御院也元暦元年七月廿八日許降位
とまこなる。今の山乃 三神山近江の上山なるは松のれいと
少くもささくささく物なれい君の代々八百代の子と
大嘗會の風俗の奇なりと云ふ。祝儀の名あり。里山ゆと云ふ。上山と
三神山と云ふ。出づる。仙境なり。三神山のり。蓬萊方丈瀛洲を
自氏文集新樂府より。雪濤煙浪最深處人傳中有三神山云々

會悠紀方乃風俗乃奇と云ふ

山乃なる。為原寺經顯古

とまこなる。今の山乃松のれい松
八百代乃云々

子十九條

水

